慈悲深い聖職者×聖女

アスプルンド

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生したが、失敗だった。
どうしようもない。
だが、願いは叶えてみせる――――
という独白

目次

慈悲深い聖職者×聖女 ―― 1
聖女と姫の独白 ―― 14

慈悲深い聖職者×聖女

◆

『Ｈｏｏ（ホーウ）！　Ｈｕｕ（フーウ）！』

◆

調子にのっていた。自分は特別だと思っていた。

だから転生の特典も豪華になると思っていた。結果は無惨なものだった。

アトラスのゲーム世界に行き、

エリアボスになって殺されては復活を繰り返す。

数回で終わると思っていた。終わる気配がなかった。

怖くなった。泣きたくなった。なんでも良いから外にぶつけたかった。やるせない思いを吐き出したかった。

気づけば自分にはそんな機能がなかった。

何回目かも分からないくらいに死んでまた同じ場所で生き返る（リスポーン）。今回も同じだと思ったら違う場所。熱と風を感じた。下を見る。アスファルトなど忘れていた。

触れてみる。ざらつく感触、土と砂利と金色の細かい粒子が指につく。道の隙間から

は草花が生えている。
顔を上げる。人が行きかえっている。会話をしている。一定型文方的でなく話をしている。
上を見る。白い天井でなく、青い空だ。大きな鐘でなく、太陽がある。等間隔な窓でなく、不規則な雲が流れている。
そと…。
外だ。
外の世界だ！
涙が溢れる。身を抱き締めて、絶叫する。
叫うとは思っていなかった、世界教会からの解放。
涙を流せることに感動し更に泣く。周りの目など気にならず、声を上げる。その場でしばらく、いままで出来なかった分まで泣き続けた。
落ち着いてから前を見ると人はいなかった。大方変人扱いされ、敬遠されたのだろうとため息をつく。
後ろから金髪の少女が声をかけてきた。英語だったのと会話が久しぶりだったので、吃りながらも英語で答えた。聞き取れたのか笑顔になり、立てるかを聞いてきた。噂通りの人だからすぐに分かったとも。
人違いをしているのは直ぐに分かった。だが、言い出すことはなかった。話し相手が

欲しかった。定型文（テンプレ）ではなく、会話をしたかった。相手の名前を聞いた。相手の名前はアーシア。

よい名前だと褒めたら嬉しそうだった。

何をしていたのかを聞いたら教会を探していると言う。

教会という一言で、体が震え嘔吐した。

少女が、背中をさすってくれていると楽になってきた。

武器の冷たさや魔法の熱ではない、相手の体温を感じてまた泣いた。

◆

『神ノー？　御許へー？

Ｙｏｕ　ｓｈａｌｌ　ｄｉｅ　!!』

◆

落ち着いてからしばらく歩くことになった。道中、体の事が気になりあちこち触れたが異形の体ではなくなっていた。その最中に教本を見つけた。気持ち悪さにとらわれ、すぐにでも捨ててしまいたかったが体面が悪くなると思ってとっておいた。後で捨てよう。

こちらを思ってか彼女はよく話しかけてくれた。何か思い出を話して欲しいと願った。しばらく躊躇してから思い出を話してくれた。楽しかったこと、辛かったこと、悲

しかったこと、暗い話が多かった。何処か彼女の半生を聞いた気分だった。話終えたのか彼女が黙る。そこからしばらく無言が続いた。君は悪くないと呟いたが反応が無いということは聞こえなかったのだろう。

気まずくなって此方からも人であった頃の思い出を話す。彼女は怪訝そうにしたが、しばらく続けると楽しそうな表情を浮かべていた。しばらくしてまだ着かないのかという旨を伝えてきたが、なんのことかと聞くと顔を青くし、戸惑い始めた。ああ、そういえば教会に用があるんだと思い出して、吐きそうになった。近くに人がいないか探すと制服を着た男子がいた。事情を説明し、案内を頼むと面倒そうな顔をしたがアーシアを見てすぐさま了承してくれた。元気な人だ。案内をしてもらい教会に着いたので礼を言っておいた。私とアーシアがお礼を言うときに露骨に表情が違った。現金な人だ。

立ち去ろうとするとアーシアが袖を掴んできた。一緒に入りましょうと言って共に教会に入った。中にいた神父と鉢合わせになった。途端にアーシアの周りにいる数人から偽物だの、牧師服は偽装かだの、教会がどうだの声高に罵る声が此方に浴びせられた。

嗚呼、一緒だ。何回と繰り返したあの時と。問いかけ(声)は別でも状況が全く一緒。

敵意、侮蔑、驚愕、不信、殺意

舞台が似ていて余計重なる(ダブる)。

呆けていると黒い翼人から攻撃を受ける。かすっただけだが血が出ていた。
痛い、痛い痛い痛い。
いやだ……嫌だ！痛いのは、死ぬのは嫌だ殺されるのはイヤだ！
いやだ嫌だ嫌だ嫌だいやだ！
背を向け全速力で逃げた。
幸い追ってはいなかった。
また、殺される、世界が変わっても。そう思って身を隠してまた泣いた。

◆

『迷えるモノたちにはコレデース！』

◆

２日がたった。家はない。追っ手はいない。話し相手もいない。空腹感もない。喉の渇きもない。ナイナイずくしだった。あの感動は、あの涙はなんだったのか。感情すら磨り減って麻痺していた。公園のベンチで佇んでいるとあの女（アーシア）がすぐそばの道を通った。すぐさま離れようとしたら、脚がもつれて転けてしまった。その音を聞いたのだろう彼女が此方に気づいた。
叫び声を上げて、手で距離をとろうとするがすぐそばに遊具があったためそれ以上離れられなかった。手を合わせて赦しを請う。

許してくれ。悪かった。騙すつもりはなかった。ただ話がしたかった。人と触れ合いたかった。殺さないでくれ。死にたくない。

――――まだ、生きていたい。

この願いを叶えるために、手に、頭に、目に、言葉に熱がこもった。

温かさを感じた。魔法の熱ではなく体温を感じた。彼女は涙をながして、此方の手を握っていた。振り払って逃げようとした。今度は腰の辺りから温度を感じた。彼女が此方にすがり付いていた。そして聞いた。確かに聞いた。

私はあなたを傷つけませんと

信じなかった。信じられなかった。私も言う。

あの時殺そうとしたと

この女はそれを認めた。認めた上で大丈夫だという。

ふざけるな。滅茶苦茶な理論だ。

信じられない。お前も辛い経験をしたなら分かるだろう。

人のいうことは信じられないと、嘘ばかりだと。

この女はそれに対して答えない。だがすがってくる。すがり続けてくる。腰にまわった腕に力がこもる。

離してくれ。

離しません。
離せ。
いやです。
離せっていってんだろうが！
いやです！傷ついている人を、まだ生きたいと思っている人をそのままにしておけません！
何を――――
と言いかけて膝から崩れ倒れる。
まだ逃げなくてはいけないのに……！
視界は暗転した。
◆
『神にィ・逆らう・不届き子羊ッ！
そんな・奴にはァ・誓ってもら　Ｈｕｕ（フーウ）！』
◆
目を覚ます。ベンチに寝かされていた。辺りを見ると人はいない。
殺されなかったことに安堵する。べちゃりと何かが膝に落ちてきた。顔を触ると額の部分が冷たい。見覚えのある生地だ。確か…

あの女(アーシア)が被っていた…

もう一度周囲に目を凝らす。彼女が店から出てきた。

びくりと体が反応し、逃げようとするが声をかけられた。けして早くはないが走って此方に向かってくる。一目散に逃げようとすると転けた。いや、私ではなく彼女が。それと同時に此方になにかが飛んできた。とっさに避けるとなんとも懐かしいナイロンに入ったお握りが地面に着地した。

訳がわからなかった。なんだこれと独り言を呟くとお腹空いているようでしたので彼女が言う。

空腹は感じていないがと言うと感覚が麻痺しているのだという。拒絶しているとも。当たり前だ。此方を殺そうとした奴から飯など貰えるかと言ったが涙をため、外装を剥がしたお握りを持って此方に迫ってくる彼女。全身が震えており、小動物が怯えている様を幻視する。

なんだこれ罪悪感半端ないと口にはださないが思考する。分かった、分かりました。一口だけですよ!とお握りを相手の腕からふんだくる。乱雑に食べると懐かしい味がした。塩の味、米の食感、海苔のパリっという音。全てがもう、手が届かないと思っていたもの。なんてことはない日常がそこにあった。気がつけばお握りは無くなっていた。全部食べきったのだ。くれた彼女の顔を見た。笑顔だった、眩しいほどの、それこ

そ人間時代にすら向けられたことの無いような綺麗な顔。

自分の手を見た。米つぶがついていた指を口に含んだ。塩と海苔の味がした。麻痺していた感情がほどけてまた泣いた。

落ち着くまで彼女はそばにいた。気がつくと腕を擦られていた。気恥ずかしくなり飛び退いたら悲しそうな顔をした。

イやちがうこんかいのはちがうのだこわくてとかころされるとかそういうのではなくてただきはずかしくてなんというかきれいでみとれそうでこわくていやいまのこわいはちがくてその——

まで言って手のひらを前に出され発言を遮られた。プルプルと震えて顔色を伺うと真っ赤だった。綺麗とか言われ慣れてないのかなと思っているとお茶の入っているペットボトルを渡された。一杯泣いていたからとのことでありがたく頂戴しようとするが、その前に謝っておく。

君はただ見ていただけで手を出したわけでも命令したわけでもない。ただの傍観者だったにも関わらず必要以上に怖がって罵ってしまってすまなかった。

謝罪を終えて彼女を見ると泣きそうな顔になって謝ってきた。要領をえずご免なさいを連呼していたが、頭を抱えて止める。両者が互いの非を認めたのだから謝罪は終了だと言って抱えているペットボトルを抜き取る。

目にたまった涙を拭いてからではこれをと言い空の両手を差し出してくる。一連の流れで気づいてなかったと分かり笑った。吹き出してたっぷり3分ほどは笑い続けた。彼女が此方を叩いてくる。ポカポカと擬音が聞こえてきそうな拳だった。

◆

『導ィてやる・子羊メーン！
天罰デッドナーウ（Dead now）…』

◆

また今日もベンチにたたずむ。あれから何日かに一度、昼には公園で昼食を一緒にするようになった。なんでも気安い友人ができたようで嬉しいと言っていた。

自分は友人だと思っていたので、伝えると顔を真っ赤にしていた。赤面はもう見飽きたというと、ポカポカ叩かれた。

そのやり取りを楽しみにして、もはや日課だなと苦笑していると見覚えのある制服の少年が此方に近づいてきた。胸ぐらを捕まれ怒鳴られる。

アーシアはどこだ。返せ、彼女を返せ！と矢継ぎ早に此方を罵る言葉と共に怒鳴り散らしてくる。

なんのことかと聞くと惚けるなという声と拳が此方に向かってきた。首の動きだけで避け、腹に蹴りをいれる。腹を押さえて蹲ったため顔をつかんで此方を向かせる。

で、何だって？

唾を吹き掛けられた。手を離して顔を拭くと同時に腹に拳が突き刺さる。私も少年と同じように蹲る。

同じ制服を着た少年と少女が此方を見下している。またアーシア何処だ彼女を返せと怒鳴り散らす。しかも今度は二人（デュエット）でだ。

教会ではないのか？

そう言うと此方を見向きもしなくなり走り去って行った。はぁ、とため息をひとつ。この体は脆すぎるなと始めの感動とは相容れない感想をもちながら、痛む腹を押さえて教会へ向かった。

教会に着く、まだ大丈夫そうだ。大勢いるけど大丈夫そうだ。この体でも持つだろう数人がいきなり魔法を放ってきた。おいおい、いくら対性があるからって直撃したら痛いんですよ。手で振り払い中央を突っ切る。

戦っていた覚えの薄い少年はスルーした。

奥へと進む。アーシアと女の翼人と少年がいた。

走ってアーシアの方に向かうと別の翼人が現れて、此方を拘束した。

もがくが逃げられそうにない。跪かされ顔を蹴られる。脳が揺れる。意識がぶれる。何かをしゃべっているが聞き取れない。誰がしゃべっているかも分からない。

薄く目を開ける。

女の翼人が何かを言いアーシアの手に触れた。

手を繋いだ。

そうすると途端に五感が研ぎ澄まされた。

……。

響く弱者の絶叫と高笑い

その中で、確かに聞いた彼女の願い。

生きてください。牧師さん。

死にかけているやつが何を言っているのやら

……教会、教本、手を繋ぐ二人。

条件は揃った。

しょうがないか。

ニッコリと笑って、嗤（smile）って、わらって（laugh）、ワラッテ（smile）。

自分を押さえる翼人たちを腕の力だけで引き離し女に投げつける。女がなにかを言うが自分はアーシアとは逆方向へ走り出す。壁の前でひとつ短く深呼吸。

そして私は言葉ヲ紡グ（laugh）

『……祈りナ・サーイ…』

６本の腕を広げる。テンションを高める。

自分の願いは叶わない、それはコレになった時点で決まっていること。なら本来の生き方を優先させてもらう。

一人の少女のために戦う。

あと反論させてもらうが、

貴女の方こそ生きなさい。

さてと泥臭く未来(希望)を紡(誓)ぐ　としましょう。

聖女と姫の独白

私の名前ですか？私はアーシア・アルジェントと言います。この町に来た目的ですか。そうですね、いろいろありましたけど堕天使について行ったというのが主ですので、目的はないに等しいですね。何でしょう？私に聞きたいことがあるんですか？正確には牧師さんについてですか。はい、あの”人”はとても良い”人”ですよ。出来る限り詳細に話せ？分かりました。そのときの心情も含めてお話ししますね。

いつ知り合ったかですか？確か駅前でしたね。そうですね、あの”人”は…すごくすごく、泣いていました。私はあの”人”を同僚のフリードさんと思ったんです。だって人目も気にせずに泣いているんですよ？ずっとずっと。あんなに目立つ行動する人って教会関係者を探してもそうはいません。　だからおそらくフリードさんだろうなと思いました。で間違いました。あの”人”は教会とはおそらく何の関係もありません。あの”人”はあの”人”でただ、やりたいことをやっていただけだと思います。関係性ですか？友達ですよ！あの人は!!いろんなことを相談しました！反省も聞いてもらいました！あの人はただ一言、

『君は悪くない』

と、言ってくれた人なんです…。

その…教会を探している最中でしたね。あなたの下僕と知り合いました。私を見ていやらしい目をしたそのヒトです。牧師さんもちゃんとお礼を言っていたのに、あの日、そのヒトは私にだけにお礼を言っていました。その時点で印象は最悪ですよ。何を勘違いしたのか知りませんけど私はこのヒトに対して何の感慨もありません。 ただただ不愉快なだけです。本当はここにいて欲しくありません。話し合いに参加して欲しくありません。

話が脱線しましたね。何でしたか?教会に行った時の事ですか?仲間割れ?いえいえいえいえ。ただそこで運悪く本物のフリード神父と会っただけですよ。堕天使たちはみんなあの”人”を罵倒しました。ただのいい”人”。いい”人”だったのに…!あの”人”は傷つけられて、叫び声を上げて、その場から逃げ出しました。私は追いかけようとしましたが、 堕天使から止められました。そんなことよりも、儀式の準備をしろと言われました。どこかフリード神父が、面白そうな顔をしていましたけど…。今更どうでもいいですね♪

で、二日ほど経った後です。公園であの”人”を見ました。 私はその時、買い出しに行く途中でした。何か趣味のある堕天使に余分にお金も貰っていました。とにかくその時は、余計なことを考えまいと、仕事を頑張っていました。でも、あの牧師さん、ボ

ロボロの格好でいるんですよ。　逃げ出したあの日のままで。何もかも削ぎ落とした能面のような顔をしていらっしゃいました。放っておけなくて近づいたんです。そしたら、あの”人”はすぐに叫び声をあげて逃げようとしました。腰が抜けたのか這ってでもにげようとしていましたよ。遊具があってそれ以上脱け出せなくなると許してくれ殺さないでくれって、泣きながら懇願するんです。そこで私は確信しました。この人はただ巻き込まれただけなんだって。その後の言葉がすごく印象的です。

まだ生きていたい

それがあの人の根幹、全てでした。私は手を握りました。ただ元気になって欲しくて。私の神器『　聖母の微笑み（トワイライト・ヒーリング）　』は、触れた相手の傷を癒すことができます。だからあの”人”の手を握りました。その時は、ただただ恐怖していました。すぐに私の手を振り払って、逃げ出そうとしました。　でも私は諦めきれなくて、あの”人”の腰あたりに抱きついたんです。そして私は言いました。

あなたを傷つけたりはしないと。

でも牧師さんは喚きます。信用できるか、どうして自分を殺そうとしたやつを信じられるのか！と

そう言って逃げ出そうとしてました。でも確かに私は見たんです。というより感じたんです。腰の辺りに抱きついた時から、私があなたを傷つけないと言ったその瞬間

に、あの人は間違いなく安堵していました。あくまで一時的ではありましたが、だから私はまた何度も何度も　あの”人”を止めようとしました。そしたら急に、あの”人”の力が抜けたんです。

ずっと緊張状態だったんでしょう。何もする気が起きなかったんでしょう。空腹の音が鳴っていました。ひどい熱もありました。私は、自分のウィンプルを牧師さんの頭の上に置いて、冷やすようにしてから、余分なお金で食べ物を買いに行きました。買い物を終えてお店からでると、牧師さんは起き上がっていて、また私から逃げようとしていました。急いで駆け寄ろうとしてこけてしまって、手からおにぎりがあの”人”の方へ向かって行ったんです。鼻柱を抑えながらあの”人”に近づいて　空腹そうだったのでと言っておにぎりを渡しました。あの”人”はどこか困惑した様子でしたが乱雑ながらも、ちゃんと受けとってくれて、食べてくれたんです。一口食べた後、一瞬だけど止まって、その後すごい勢いで食べ進めました。その様子がどこかおかしくて、幼くて、私は笑っていたと思います。

そして困惑した様子で、こちらを見た後、指についたお米を口に含みました。そこでまたあの人は、駅で会った時と同じようにワンワンと泣いていました。私は落ち着くまで寄り添っていました。片腕をさすっていました。そしたらあの人は…フフッ、すいません、ちょっとおかしくて。とにかく笑ってたと思います。それで私はお茶のペットボ

トルを差し出そうとしたんです。そうしたらあの人が謝罪してきました。
君を疑ってごめん。ただの傍観者だったのに疑ってしまってごめん。
…どこか、なぜ止めてくれなかったのかと言外に言われたような気になって、必死にごめんなさいを繰り返していました。そしたらその”人”は優しく頭を抱えてくれて、
お互い謝ったんだから、もうおしまいにしよう
と言ってくれました。それで改めて、お茶を渡すことしたら手元になくてどこかに落としたのかなと必死に探してたら、牧師さん、笑ってるんですよ。手にお茶のペットボトルを持って。私が渡そうとしたお茶でした。気づいてなかったんだと言って、とても楽しそうに笑っていました。私はからかわれた気がして、結構な力で牧師さんを叩いていたんですけど、牧師さんには全然効いてなくって。むしろ、そうやって拳を使って叩いているのに　、あの人はもう、私に対して殺されると思ってないんだと思うと嬉しくて。その後、一緒になって笑いました。
その時の様子から、先ほどの謝罪は本当だったんだと確信が持てました。ただ生きていたい普通の”人”なんだって……。
それから、何日かに一度は牧師さんと一緒に食事と話をしていました。今までのこと、これからのことを話していたんですが、どこか言いにくそうにしていたので、ノートとペンも食事と一緒にお渡ししました。考えがまとまったら見せて下さいとそう約

束してから1日経った後、牧師さんの所に行こうとしたら　堕天使が私に対して、時期が来たと言いました。それでフリードさんと一緒にお仕事をして、そこの下僕と会って、私は帰ってきたその瞬間に、十字架に吊し上げられました。怖かったです。とてもとても怖かった。準備ができたと言って堕天使たちは楽しそうでした。もういないですけど。フリード神父はこちらを見ようとしませんでした。もしかしたら良心の呵責があったのかもしれませんね。もう、あの人もいませんけど。それで、あなたの下僕がでしゃばってどうやってか知らないですけど、私のところまで来て、助けようとしてくれたんでしょうね。結果は無残なものでしたけど。目の前でひざまづかされて、蹴られて、殴られて、嬲られて、見てて本当に哀れでした。そういうことは聞いていない？申し訳ありません。詳細に話せということでしたので。そして、そうしている最中に、お腹を押さえて、両腕の皮膚がボロボロになった牧師さんが来てくれました。そしたら一直線に私の元に向かってきてくれました。でも殴っていた人たちが牧師さんの方に行って、同じように跪かせて、殴っていました。　それは憐れと思うことはなかったのかですか？憐れと思いました。だから私、もう終わりかなと思った時堕天使が手をつないできたとき最後のお祈りとして願ったんです。

生きてください、牧師さん

その時です。急に、どこからか音楽が聞こえてきたんです。はじめは小さく、その後

少しずつ大きく。結婚行進曲でしたか?そんな音楽でした。祝福の金の音も聞こえてました。何かの皮肉かなと思ったんです。そしたら、手を繋いでいた堕天使のすぐそばを殴っていた仲間たちが通り過ぎて行ったんです。牧師さんはすでに立っていました。堕天使は激昂して、牧師さんに攻撃しようとしました。でもその時にはもう牧師さんは、壁際に移動していて…。すぐに逃げるかなと、そう思いました。でも私はそれでよかったんです。私の最後の願いは叶うんですから　。本当は、もっと牧師さんと一緒にいたかった。友達と一緒に笑いたかった。友達と一緒にまだ話せてないこともたくさんあるのに。ノートだって、見せてもらってないのに…。

ごめんなさい。話が脱線しました。

そして牧師さん　聖職者らしいことを初めて言ったんです。祈りなさいって、そしたら教会自体が作り変えられてるような感覚があって、私にかけられた術が一気に壊れたんです。少し呆けてしまって、気がつくと魔法使いたちや、フリードさんと剣士さん。いろんな人が私の十字架の近くに集まってました。牧師さんは上にあった鐘の近くまで一気に跳躍して、そして異形の姿になってました。棺桶にまたがって、腕が六つになって　そのうちの4つで聖書を持ってて、前の方の二つの腕でどこかリズムをとってました。そして言うんです。

誓いなさい

誓いなさい
病める時も、健やかなる時も、神の身元に
ｙｏｕ　ｓｈａｌｌ　ｄｉｅ！
ポカンとしてどうしました?あなたが知ってるものと違いますか?些細なことですよ。そして聖書を持ってる手で、周りの人たちを攻撃し始めました。牧師さんにそんなことはやってほしくなかった。でも全く表情が動いてなかったですけど、泣きながら、叫びながら、あの”人”が戦っているように見えました。フリード神父もどこか同じようにハイテンションで切りあってました。どんどん傷が増えていくなかであの”人”がいろんなことを誓わせ始めたんです。
殴らないこと
技を使わないこと
道具を使わないこと
えばらないこと
そしたら、周りにまたがっているのとは別の棺桶が浮き始めて、その誓いを破った人の方に飛んで行きました。　それと同時に、色のついた鎖が絡みついて、身動きを取れなくしてました。その術でフリード神父と取り巻きはみんな行動不能になってました。唯一、あの女だけは　普段の姿とは別の姿になって、助けてほしいとあなたの外僕に頼

んでました。そこのヒトに感謝すべきところがあるとすれば、その時助けに入らなかったことだけです。おや？別室送りですか？もうこれ以上辛い思いをさせたくないと？そうですか。甘いですね…。そんなに怖い顔しないでくださいよ。自分の立場で置き換えて考えてみてください。自分の好きだった人が、勘違いで傷つけられて、見捨ててもいいところで、こちらに向かってきて、助けてもらって、なのに私は、何も返していない……。もう、返せない……。

……続けますね　それであの人は、聖書であの女をボコボコにした後、私の鎖をちぎってゆっくりと床に下ろ　してくれました。

その時に　あなたの下僕が近づくなとか化け物とか、そんなことを言いながら牧師さんに殴りかかってしまった。他の人は傍観に徹して、何もしませんでした。むしろそのままでいてくれればよかったのに。そうやって牧師さんが攻撃を受けていると、どんどん体が小さくなってきました。それから仰向けになって倒れたんです。どこか西日がステンドグラスに反射してて、眩しかったのをよく覚えてます。それで、よく座っていたベンチと一言遺して

神　みもとへ　今から行くと

言い残して、消滅しました。はい。消滅です。体は何も残ってません。衣服は塵になって消えました。残ったのはあなたたちが触れることすらできない聖書だけでした

。それから後はあなたがたが見た通りです。私は聖書を抱いてワンワンと泣いてました。あなたの下僕が肩を抱こうとしてましたけど、ただただ気持ち悪かったです。

私はどうなるんでしょう?グレゴリに突き出しますか?それとも魔界で裁判ですか?別にもどちらでも構いません。

……そちらの女性の家で預かると?私を?なぜですか?

グレゴリからはもう事件は関係ない。そもそも起こっていないことになったと。だから裁判もないと。それでなんで私を置くんですか?ひょっとして神器が目的ですか?貴重ですもんね回復系の神器。どうしたんですか?顔色が悪いですよ?それとも何ですか?置いてあげるんだから感謝しろとでも?しませんよ!!監視の名目でおそらくですけどあなた方の学校に入れとかも言われるんでしょう!?もちろん教育を受けさせてくれるのはありがたいです。ただ、あなたと、あなたの外僕は勝手な判断と勝手な独善で動きに動き回ってあの”人”を殺したんだと自覚してください……!

さて、それでは失礼します。何ですか?学校に入ったらオカルト研究部に入れ?はいはい、わかりました。ここの土地はあくまであなたがたのモノですからね。

……今のはシャレが効いてますね♪親父さん聞いたら喜んだだろうな…♪

スタスタスタ

ではさようなら、また明日とかですかね?

……殺人者さんたち……!!

ガラガラピシャリ

……。

沈黙が場を支配する。

思い出すのは話をしていた、あの人の目。

とても、くすんだ瞳を。もう本当に希望なんかないんだ。そう悟って自棄になっているようにも見えるあの目だ。

リアスや一誠くんにはかわいそうですけど、でも今回の件は圧倒的なまでに状況把握が足りてませんでした。リアスは土地の管理者としての事件への対処が欠けていて、一誠君については調子に乗りすぎた。聞けばアーシアさんは一誠くんのことを何とも思っておらず、いえ、むしろ嫌悪感すら抱いていました。勝手に舞い上がって、勝手にはしゃいで、周りにも迷惑をかける。殺されたのも殺したのも　自業自得だというのに、反省の気配も全く見えませんでした。アーシアさんが、言葉を交わしてくれるまでは。

彼女はどうやら自分の置かれた状況を正しく理解しているようです。自分の神器が貴重というより自分たちが必要としていること。今まで逃げ続けた人生からも、わかっ

ているのでしょう。そしてここから逃げられないということも。リアスは、暴言を吐かれたとまだ怒っています。何も知らない子がとか、散々こっちを侮辱してとか　そんなことを言っていますが、もう本当は分かっています。自分達はあの人の大切な”人”を殺してしまったんだということを。何の罪もない人を殺人という手段で排除したことを。

一誠くんは、まだ、受け止めきれないようで

嘘だ、俺は悪くない、あの牧師が悪い、とうわ言のように繰り返しています。

言わなきゃ自分を正当化できないものね。

１６、１７歳の普通の人だった一誠君には耐え難いコトなのかもしれない。

何と言うか、強力な神器を持っていても、やっぱり使うのは人なんだなと改めて再認識できました。

木場くんは青ざめています。自分と同じ境遇かもと思案しているようです。

子猫ちゃんは吐き気をこらえています。普段は自分の側にお菓子を置くのにお皿すら出していません。

結局、そのあと話すこともなく気まずい空気のまま解散。

私は監視のためもあって、神社の方に一旦帰っています。玄関前でうずくまるアーシアさんを見つけました。駆け寄って見ると泣いてました。嗚咽を漏らさず静かに、とに

かく辛そうに。懐を見ると　どこかま新しいノートがぐしゃぐしゃに抱きしめられていました。泣きながら、彼女は言います。

牧師さん、牧師さん、牧師さん。

会いたい、会いたいです。

私は今、寂しいです。

……これからいやが応でも、この子は巻き込まれ続けます。私たちの勝手で。それが……それがどれだけ残酷なことなのか……。私たちはいい。自分の意思で悪魔になったのだから。しかし彼女は牧師が守ったおかげもあって人のまま……。

頭が痛くなるのも分かっていましたけど、祈らずにはいられませんでした。

どうかこの子に　この先　祝福がありますようにと

案の定、頭が痛くなりましたけど気分転換にすらなりませんでした。